



今昔集

~ 5  
5621



5621

於て筆の如く秀句を焼捨の月々に  
 依りて道も照らし十六夜に  
 了然と月夜に心ある娘も  
 三何草池江之の雄嶺  
 此もさうに古多るに思ひ  
 有る所は  
 翁の蹟と  
 村中  
 文科の  
 遺り



おまある日善光寺社交と信也  
身一様子座を我支て生地は  
所る古人手書多海はた人の句  
流一集と来一信成昔と名は  
たを長莊と徳保るを甘菜  
の雪と魚と夜とに古と名し  
甲辰季冬

善光寺末祐書



合を昔集

享和元、あは年朱樹史家の帰りに柳在亭不  
とある事十日あまり其後おとあま也ひひくも  
あつひやせや軽みうそ一信ふか老とがうて世を  
みまゆりかろうぬさきとてうは地よまきふ紙より  
日毎に初まき一日抱芝を在のまあよりて朗  
相見り、先は他の書をよほあせんと身一様子座を  
ひきき、古人を志して、とせりぬ

卓池

思ふ子かきくはくせん昔秋

月花よりひの跡もやき 抱 芝

新穀の種もるまゝうらかき 可 厚

うく踏つきよきあき程 墨 芳

折らけし宮花もよあふみ汁 雪 頂

人怖もせぬ奥前花鴨 痴 憐

一法らよあさきをわりの涙もけ 竹 堂

指ろつゝ新く日くす風呂 桑 毫

糸宮の志産も黄よりけし 紅 魯 儼

まかせく髪花目立ちけりやせ 棠 李

静なれ忘八り富の小ちる前 梅 軒

志らと西とも定らぬ風 文 昌

鳩花みね所へ雀の啼よりて 緑 毫

役替りより志ちる村柄 竹 雨

筆太の書しより花挽け 札 雨 賀

たり洲一たる福活能業ふなり  
 花より月も綻のあま阿のり  
 おく炬の巾一き旅の御きあし  
 若免うぬけもねふあそらうき  
 産産のとも路のみくまきり  
 所古被よりりもまらき寺能鐘  
 ちけりあねをまたまき霜風  
 新うき能目尚ふ志くまひと川松

楚水  
 若莊  
 石泉  
 梅塘  
 橋榮  
 松雨  
 菱竹  
 菱岱

借恙能志高きくく山科  
 月けもあき事能年うる嘉定吟  
 樂能糖古平あきく能世ぬ  
 推ておく心又意をさそをまて  
 火打おとく一あと度里する  
 さきあのかをり一も十三来  
 柚屋一能ふのとかき能橋棚  
 来く人をたのまうの毛見の觸

呉妻  
 真砂  
 伊考  
 露石  
 指扇  
 士芳  
 一学  
 杜庵

言はくまりの買あをせたる 千鶴  
 乙子のちいさな店のぬいとあり 畏之  
 市のひけきを鯨言う飛 古石  
 あとくまをかきへる花の咲かす 碓岩  
 山あがりみちを 藁たんろ 瀬堂

秋は秋をゆくも軽し月夜ふ 士朗  
 暑日やをゆくもらふあいの砂 松見

夕の光や見ゆ所も花もまじ 岳嶽

冷文の古人

昔々や魚ん〜 魚とありとあり 柳菰  
 あたの旨味ふき口をさす 文兆  
 古の舟を鳥も啼らんらん 希言  
 涼〜きや素湯の白いゆき 孚司  
 燈社の木も新まらぬ 紫路  
 花の〜あさ〜 行ぬあふ〜 社厚

中宮をかくらへ月のあきうち  
吹まじりむやせりうきのむ  
玉もこれよりありたてまはる  
如 五 竹 紀

牟池老人の志すく旅の疲しき休  
めらうらら確夜定杖を度すもあ  
かたうらやうく天保よるまは地  
まゝ絶路を盡し去るを道ゆく一  
左の巻をあらわすもまゝの巻の巻

痛きやまの東風の石をさす  
猿 山

あつちもゆきあやうらー萩芒  
かけむきよあ引まはゆい色くれ  
あつちかうまのり降り東の雪  
自晴やむい沙黄は風まくる  
まの糸小綱まけけ放たうれ  
山寺は鳩の餌を喰雉子かた  
花やまの麻葉のからく来りま  
あつちの露まらりー草紅葉  
招 山 逸 洞 路 人 守 一 猿 左 松 角 春 令 甚 祥

岩を水も磨くおとす砂の音 洞 芝  
 漱け音の上を越えり 春水原 左 岸  
 無道作まき桑姑一也 花の窟 洪 水  
 甚く花よ出やうとすき人け集る 夢 洞  
 舟をもちと船ぬこまいとらうれ 反 古  
 信やまき空よりまもる花もくを 欽 堂  
 濃色も水けすむあり 萩の亭 峰 二  
 年より花ひまき言う花む月くれ 業

くらむく日逆火青し人の程 几 半  
 山とく人け見る日をきかりけ 白 理  
 面りある日もお不路く木水蘇 亀 丈  
 今更くく今年も志あり 藤の菟 文 路  
 喉水のふと見くきき桔梗をれ 武 田  
 海一峰時ふや餘水の雪けくのけ 櫻 居  
 念入る喉を足しり赤つをき 鬼 海  
 嘗きききしししする枯野に 伯 希



大を小せし馬よりすれを秋能條 一 芳  
 痛く人にとり人ゆの春の山 董 國  
 聖りをおりしちるおもきく人の月 東 翠  
 待宵を男をかりし月兼りれ 学 壽  
 降る来る白くあつけ 崎子うる 竹 翁  
 仕合を國のうき體やみちの月 古 言  
 ちるまよゆををりてを梢う那 無 能  
 まつるや不のく 明く 風のまぢ 古 菱

物をもつ 棚や本は留めこそ是月 文 笑  
 月をの夢をさ免たり冬こもり 米 居  
 をぬいそく 風のうくたり 山の空 柏 溪  
 其あやや回らら 島うらら 鳴ひを里 一 考  
 是と何の免きくともたうめりてく 白 雄  
 木の葉 檜 楢 榊 梅をみ下をせり 素 翠  
 水鏡ふく 庭よ 若きう 桑の 結 仕 蕉 雨

家好子の思ひこきみーむん下  
 ちねといふも花よえゆる香うれ  
 暮ららる人好しありきみの月  
 人の住なりよとて新きおれは  
 うらた人よりおれやあねの言  
 勤うらよみおれけおなりーむん世  
 舞しよや休の志のや精乃賦の  
 尺取を新しよーとらよとねの空  
 葉 揚

廿

ほろおれをなすいの色乃ねんそり  
 宋古をなすありそねはるりそね  
 風はつややゆの魚の種をさる  
 指より新し旅人程よりありつ  
 新つやや新のよみ色と森とりのま  
 つつやと唐よなると言よつとをそ  
 月足と旅よみとそい抱こつとさ  
 希 杖  
 伯 先  
 葉 葉  
 葉 葉  
 葉 葉  
 葉 葉  
 葉 葉  
 葉 葉  
 葉 葉

飯印しりしと書きたるのき夕魚水  
 乙二  
 白子も手よりあー 宋古亭  
 長翠  
 山吹也華臺より来り字新中  
 西月  
 吸くはさるるやと新の秋  
 蒼乳  
 何ひし川なると深しき春田うれ  
 應了  
 一トありきあはるる味やも川うらを  
 何丸  
 早乙女や流年半へ恨きく  
 桐南  
 山吹也月も日毛さき 九折  
 宋木

柳青うす粉や芽もまろく元あうち  
 嵐外  
 口切牙峰是くゆくやまけは  
 雉啄  
 名月やととらくく日字新也  
 嘗石  
 ふく東せしあはるるを細く楯  
 護物  
 畫空は舟へ思ふやまひも襟  
 沙路  
 招前くく人  
 山吹新方さきくや所忌は鐘  
 梅室  
 扇を是く風の出ぬ扇の表の月  
 岱年

松蔭より人跡を不せし苔のた  
 山里やまのりみありる雪の降  
 晴渡る月や遠音の水鳴子  
 使しそけのき志うくや二日矣  
 梅の香や鼻緒きりしそ多片愛  
 鼻をそてかくも他法やうめの毛  
 三ふくやういくしそをき事のみ  
 灯明りも葉は束つてやれそま  
 其山

十一

青竹より戸櫃もかきりて軒の梅  
 春をそくくゆる百志をそくや昇る月  
 けしそけもけそくそくそくそくそく  
 空雀やうく下るそけしそくそくそく  
 村こそそくそくそくそくそくそくそく  
 雪をそくそくそくそくそくそくそく  
 待あそくそくそくそくそくそくそく  
 ちやひそくそくそくそくそくそくそく

白 鴉  
 鼎 左  
 雀 叟  
 桐 一  
 而 后  
 梅 鳥  
 水 竹  
 完 悟

送り火や志す新柳をき人通り 蓬宇  
 先づのむらびの空や天竺川 エン 青英  
 山吹の花もゆきもや東乃虫 スン 碧山  
 山彦や手紙うらあつらま川 梅 漣山  
 出逢ふや帰るゆつるや 薩くまむ カヒ 欽草  
 そのまゝてあるや 田所まふの泡 兔蕙  
 表替溜るまふや 穉あふ サカミ 立宇  
 何なりとあまをばあき 秋の風 ぬく

先づと一葉へびく牡丹 ムサシ 五渡  
 流き来る芥々々や ぢくかた 下フサ 楚南  
 雪きくわくわくや 灯籠を燈籠 水 見  
 聖に清き蓮の白の志うら 近江 礪山  
 清き月やわきを志くきよ 上毛 虚白  
 葉のよふとちりま川や 春の月 竹烟  
 むらさきを志くしからま 西 馬  
 月の出や志くま 松の木 下 朗

題のよき下あのみね田西りな 難周  
空かきみしつこをさるる 比中 不朽  
水音もかきこくまなく流せたり 九未岐  
いねむやあまきらね録をよる 木芝  
年明く 風はまきぬやまきいふ 飯侖  
ちつろや兄もさるるあまのまら 柳嶋  
あうなむきものち聖あり 夜さるり 多よめ  
夕顔や垣の外まき寺やーき 苺来

ちつろくく風のふらりるまくれ 文芥  
松の露落るや 春もまきりくま 大垣  
すきあつ枝もまんと梅の最 梅充  
と云はる立木まきぬ小襟うれ 東郊  
志中ふ湖見ゆるかき壁うな 岩風  
壁よりま見ゆまるとる波る所 柳壺  
七ふさふ秋のまきや 向島 柳舟  
暖簾も款まきり出まきみえぬ 閑那

菱花の唐浪多川やあらし山江戸 風朗  
 一具  
 誰をよりとく中のけおく菱花那 由擔  
 船鳥の能不敷りをま川つ不いよ 逸洞  
 梅咲てかす月とさうし一寐覚ふ 茶静  
 鳴るる川中よりありわりの自 山外  
 きつつちるも操の々きさ 也藝  
 舟ははく聲を睡と鳴るる在 風高

船霧や白の枕木をかきよ来る 夢休  
 津やよぬ虫尾まかす音見う乳 桂素  
 雪は石を何より露の分限ふ 伯夫  
 懶つまを能皆あをき月想ふ 半翠  
 冬は月扇指ふて中よりけを 双鶴  
 喚はる葉は多し降る時自乳 如契  
 桂は木の葉りよみくきは 河梁  
 福福や雪ぬと知るる山の月 李茶

海苔くらむや遠く見る帆のたつゝかち 篤志  
 秋のや指の蒼葉踏て出立 淳  
 山鏡に鐘のきこふ秋のきこふ 伯遠  
 いろくはるまゝなりて彼岸丸 文路  
 元日や雀の舞ても活らゝき 小葉為経 秋桂  
 自由まゝなりぬ戸口やまゝの心 左 啓玉  
 糸へ出るとまゝの田畑も喜望の 橋十  
 喜色まゝの世下鴨の浮床うか 杜有

昔見きたる月をありとる 三  
 舟燈の光きり 四  
 船くまを細をききゆく 松  
 岸に夜多し 為  
 菊や紅葉も 惟  
 是下けり 兎  
 旅人の 兎  
 春の 侯  
 高の 高



姑多川や多より 細きねは苗 菊  
 朝歌や空をそとに 長樂  
 明くそとに 新き月や 桑 陸 産 桂  
 草花や聖日ゆくそとに 春  
 ちとそとに ぬくそとに 山 千 妻  
 唱て兄とむ 石は細や初時白 柳 花  
 福妻や目き度花のそとに 菴 峯  
 家はとの花をそとに 曲 江

汝先ね 藤 層 土 土 土 土 土 土  
 水音のまやま 土 土 土 土 土 土  
 ことくく 露 土 土 土 土 土  
 買過つとれ 土 土 土 土 土 土  
 ひけそ 土 土 土 土 土 土  
 雪は白の上 土 土 土 土 土 土  
 ちとそとに 土 土 土 土 土 土  
 打あつとつと 土 土 土 土 土 土

芦 川 之 松 梅 笠 米 山 尾 山 良 雅 附 登 守 郎

見てまゝくく人子楮紙おろそなり  
 うらゝいさふ善業一托の初たり  
 ねとまゝの包りらゝい聲をばりうらゝ  
 休むらち自らりまかけぬ藤の花  
 ねとまゝの包りらゝい聲をばりうらゝ  
 丸一日小をねめくりたなりうらゝ  
 くらゐのねいさふ善業一托の初たり  
 ねとまゝの包りらゝい聲をばりうらゝ  
 ねとまゝの包りらゝい聲をばりうらゝ

古武良

若人

六外

三津里

乙人

其秋

月外

近祥

あまをまゝくく人子楮紙おろそなり  
 うらゝいさふ善業一托の初たり  
 ねとまゝの包りらゝい聲をばりうらゝ  
 休むらち自らりまかけぬ藤の花  
 ねとまゝの包りらゝい聲をばりうらゝ  
 丸一日小をねめくりたなりうらゝ  
 くらゐのねいさふ善業一托の初たり  
 ねとまゝの包りらゝい聲をばりうらゝ  
 ねとまゝの包りらゝい聲をばりうらゝ

若久崇

柳玖

龍村

周晴

梅温尼

春甫

志國

志法

新うらうらうんきうるやをたれをみ  
 帰る石法をそと大きく見えたり  
 よう輝くこころしりし仲るうらうら  
 高たうくや山のまのこの常う如ぬ  
 月よりなりて梅の香来りや机然し  
 胸を痛むはなしく中居の友おとせ  
 来るゆの花をてとくくききよ  
 若さを水よりけ汲をまうれ

菅室  
 希風  
 三久  
 阿公  
 子年  
 左右右  
 梨山  
 松臺

見ぬうらえきけをきく一涅槃像  
 うらうらや中居のまのこの色  
 絶えたる柳花うらうら日暮り  
 庭をゆくをきくい愛よまぬの水  
 新うらうら風よ音あるとくさよ  
 ちいさな花も手柄も愛やまの若子  
 三月月のかんざしを足ゆききよ  
 ゆわうや青龍まききく一松の上

聖石  
 山唐  
 素外  
 露月  
 一若  
 兼泉  
 玉丈  
 一朗

梅能夜ひくくも能く言さう乳 縣山  
 往還一四能出もくくふも能かき 白堂  
 黄きき戸日中霜の能りけ 学理  
 志くくや横史もかきるも能き 月左  
 昔能く夜や何変もく村つき 斗史  
 けかけも物なきを能く一能くく 共砂  
 目能く候もあ能くもあゆるもんほ 一能  
 月影の言くゆくや冬の能 解雅

秋かき一露もく言さう能の唐 長秀  
 り能く物も能くけくも編能夜 梅賀  
 あく植も能くもあゆるもんほ 兔江  
 きん変見もああり何き能月 杜庵  
 舟もくも四五丁遠一 枯柳 梅塘  
 危もくもあも能の言さうも能き 吳融  
 世話文一 接植の梅能候もく 彦高

長月廿百信中先一様遊一通叙

石池  
 泉  
 山風の  
 大層  
 ありさ  
 あとか  
 ありさ  
 ありさ  
 ありさ

福栄  
 萩竹  
 文島  
 梅野  
 竹石  
 松角  
 榮亭  
 梅塘

石 芳

石 芳

石

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

石 芳

う光寺社友と杖をくわられて

刊

赤燈のほかに後よりあきの書

碓 嶺

古きけしき新ある所なる月

長 莊

折栗のほかに場をかりよ又折て

捲 芝

折んてまゝに巻くまぬらひ

痴 儼

崩さぬふくも来よみ雪の岸

士 芳

まゝに巻くまゝに巻くまぬらひ

楚 水

買置て裁きぬる此柄を踏て

扇 契

おもしろ捨つる身 能き右きく

魯 僊

一獲をぬるゝはぬ舟荷物

茶 庵

高かきりやらきけり 村なる

梅 賀

言傳能然より先よきけり

梅 軒

人目をよそよおたやせを

社 庵

車井のわたり 管く管の月

墨 芳

柘栲能皮よす巻る小丁權

可 厚

見よ小新酒を配ると喜先

文 昌

註

澄く白け進む夜のとほはく  
 降さるる花より直るあまの花  
 月しく折る花をさしよき  
 きせりゆ命をたつる深つ玉  
 柱の空をかぐも 画曆  
 店先を東へおふける植木賣  
 王すきや 花もさしよき  
 餅をよけを焼く雀籠交りて

出砂 緑尾 露石 竹苗 菘竹 松苗 梅塘 橘菜

春みよりふなる地境能公予  
 八お能やねるあたる旅大工  
 西の東の風能をち尼る  
 終金能多しよきねる意を  
 急まなりある寺能お談  
 明月のちる能能る後の月  
 町平ひとらのける芽種  
 軒近く霜ふむ若の通ふあり

菱盛 吳春 聲雅 何考 畏三 竹堂 菜孝 指扇



消世をたふす神のとも火  
 古石  
 雪窟より先一雪ををまきし  
 一草  
 雪窟のまき 是粒の口  
 月産  
 雪窟  
 雪窟  
 雪窟  
 雪窟

時を月四再い中橋と席をひく

志くもや旅寐の立も三月哉  
 確 炭

おのふゆにまきまきと志くは  
 漱 崖  
 水澄りしるるあり夕 時 自  
 茶 李  
 志くもやあまの焚火の煙り  
 文 昌  
 けし白の音はくまきし小夜時自  
 梅 軒  
 志くもや橋より入りたるむら  
 松 自  
 置 簪の雪紅業はる志くも  
 竹 自  
 待 巻し友待りしるる時自  
 指 扇  
 雪窟をたふす時自  
 蓑 竹

松風の横よりさのぬきくせうれ 橘菜  
 りくぬきんさくち箱の初時音 菱岱  
 くのりひく痛く刺さる降るもせう 吳嘉  
 時音も和柔なり着つぬ 嬌 糖 一 号  
 木母をを児うけへきき時音小 露石  
 やさ多小秋 暈りぬき志くせう 沖人  
 山候り兒さく日暮るし人せう 老露  
 時音さるすてあけしう 鳴の海 損山

松風よりほつて二度来る時音小 岸雅  
 大粒平なりて晴る志くせう 子鶴  
 千加けしこ華ももかゝる時音小 梅塘  
 高川の素もくし志くせう 士 芳  
 東嶽のまつと枝崩れ時音小 珠 甫  
 丸一日志くせうやかゝる舟 長 莊  
 桑さつのももやうももや初時音 抱 芝

志くくくや眼くはく涙の飯をり 可  
時くくや粟津の原は雲の月 竹  
心くくくくくくくくくくくくく 緑  
おきくくくくくくくくくくくく 空  
日くくくくくくくくくくくくく 痴  
為くくくくくくくくくくくくく 魯  
水くくくくくくくくくくくくく 何  
酒の味き免くくくくくくくく 爾  
賀

蹟摺の常くくくくくくくくく 楚  
志くくくくくくくくくくくくく 墨  
芳

尊縁精舎くくくくくくくく

ま和十あまくくくくくくくく

古くくくくくくくくくくくく

吹立てくくくくくくくくくく 卓  
地

家くくくくくくくくくくくく 雪  
頂

羅桐の倦い交へ月さし  
 遠くも一も家一のききや  
 遠くもとをりく葉の白さり  
 とも免多水のみさる庭さ  
 阿相油のまかぬらうたみつけ  
 執さほりてまやの針立  
 まつとひきつらふ眠さうり  
 様よりけりみさるはくら  
 緑庭  
 葉養  
 抱芝  
 竹堂  
 墨芳  
 梵水  
 痴僻  
 古莊

風止く葎蕪廣げく揚弓場  
 湯治の富のたうぬ木の崎  
 月前又抑くまは綿の意さり  
 燈をすまると出まぬ地角力  
 費日中磨のうらけく葉の中  
 危候初て碧紅花乃を  
 蓬餅賣さう文つさうらふて  
 山川ねとちくふりし山荘  
 可厚  
 桑田  
 石采  
 直布  
 何者  
 吾僻  
 角灰  
 瓶筆

留日探額

水多る皆けしからとおもえり

抱芝

楯ありさきや隣はの魚は穴

長莊

種を成てし一熟嵐や雪り秋

可厚

ちろろするものよ別あり桐火桶

緑毫

板より一雪もこのきもみちり

雪頂

石露は桑よ雀の糞のかきり

痴儼

字似のありふみねを楯火小

角旗

新秋や雪り晴る霞の虫

竹堂

橋下へまをまをふりきね葉うれ

魯儼

生て飛やうりのりかきまを賣

何考

日はむい下風をさすく小春れ

楚水

嵐さく来ぬや表雪の外落し

墨芳

追加古人

みくる雪山は雪さるるけり

碩布

月をいりぬるありしそ粟花夜  
 軒ひくし月も属をのゆき露き  
 々朝啼を足うらひまら髪えゆる  
 上野暮沙雪くきくまの月  
 去朝の浪流くものふちききゆく  
 ねれく人  
 奥けし小松や千代の朝日さん  
 ちく喜花空を足ゆるやうめ花夜  
 新  
 思

江戸

花雪原露うらぬ花名りの乳  
 名もふねるまきう秋の録  
 喜花空を録うまのいや梨子花夜  
 喜柳のうつりや青き墨う乳  
 芍薬や山家老人のやまのたし  
 苗一日河さきき修やねとまき  
 梅きくやうりつきかき山花雪  
 ちの年々西月免うらぬ花名りの乳  
 羅  
 紅  
 露  
 水  
 露  
 井  
 小  
 矣  
 休  
 瑞  
 清  
 輕  
 上毛  
 風  
 石  
 下毛  
 芭  
 竹

廿六

無事菴業居士遺稿

吉野山

葛踏こ冥加やの草鞋を踏つゝる  
空の中をうつけの幸やふ如帰

松島

いそつゝきりうらまをせし干松鳴  
本枯りうらまをせし物うらまをせし

は居士才まうりける情とて送るに  
文言は句おのゝ端書を畧す

去 た ち の こ も る も ち あ ら は し 月 今 宵	月 も あ ま す き 控 と 如 來 の 定 の 丸	う け て ま へ か も て 禁 し の 年 米	き り く を お も し る 老 も 啼 宵 そ	西 風 を 消 る 老 う り 中 あ き の お	月 影 を も と も 椽 の 実 影 を 不 道 を り	暮 し 日 を 暮 れ し る 中 秋 の 音	古 れ あ ま し き を う ら ま を 不 古 を	阜 池	桑 罌	桐 古	石 泉	護 物	露 谷	得 基	麻 交
--	--	---	---	---	---	--	--	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

其のそく人を新なり 秋の風 抱 像  
 ありくと 花や 聖教をいふをを 丁 知  
 草花や日ゆく かも 秋 根 あり 風 菊 枝  
 明月やひきもとくき 一志きり 菊 頃  
 庭のきひゆく 庭 一ツ 二 君ら 進 け じ 味 舎  
 たみある 昔より 多のみ あり 秋の 露 見 外  
 露 秋 香の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 茶 古  
 秋をさる 雲 け け け け け け け け け 流 芝

風 秋 音 ち かり 跡 月 ち あ き 秋 山 栗 人  
 露 志 ち せ 珠 教 け 跡 ち 鳴 り ち 露 白 高  
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 月 の 雲 静 一  
 う つ く ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 雅 堂  
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 梅 塵  
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 白 兎  
 世 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 菊 古  
 秋 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 月 歩



不列くと昔とよめるやまの秋露  
 白風のひさびさ露おく日と進丸  
 露らるや赤や空き岬の雲  
 常しとよとみるそとや帰る花  
 西影のみゆるるを白は有  
 盃の持はるる中つゆは音  
 行先とあくるからし持露の秋  
 くりと空とらと進丸  
 汝 望  
 金 令  
 風 外  
 塞 馬  
 素 明  
 三 枝  
 里 月  
 白 桂

おまのりを志つてとるる墓の露  
 世と世ととて世とやとのりとけ  
 花と人れを秋のものさあつまふ  
 見るとよふかきつゆのあや月と宵  
 秋のけり月ととて月もかきとけと  
 月夜もようく見るとよふかきと  
 よのそらわとよふかきと  
 田 禾  
 碓 岩  
 花 芝  
 長 莊  
 可 厚  
 緑 庵  
 痴 憊

いつよりそ月よきるるけうはる	茶尾
このあきこゝをみちをきりけうを	榎水
手向ちや秋の七草露かろ	竹堂
露まろく草けうくきる垣根よ	魯僂
ともしもかも雪むけくく竹の花	梅茶
あてた不考のちろくもや草花を	群雅
そのしんをいふれと淋し秋の草	其文
いふり能治るるく秋のあししうれ	雪頂

くむけを袖のおもくく秋の白 墨芳

小祥忌平

あつく指をくくやまろけいさきむ	長花
是れらの露く魚色影もなし	可厚
目く見ゆるやう替名の木の葉と	雪芳

吾事 庵の主人 業と四方の風交り 又  
又 何る時 秋と打く日 何れと 自然  
何れと 此の世を たりし 世に 世に  
せり しかる 毎年の 文月

翌日 志しぬ 男まひく なりむ の 種  
てふ 一句を 摩右の 書たりし 病の 床より  
と 東さの 有るを ありし 葉月 七日 此の 露と 夜よ

古哉古の心影を憚む風土のこの葉を  
里のせん子を可厚墨芳に惜まけり先  
とま予もまここの意をいへと尊をま  
維時天保十五甲辰の晩冬

寐覺菴長莊

